

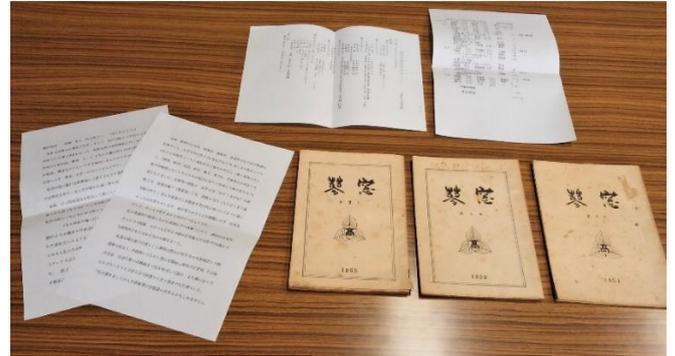


## 生徒会誌『蓼窓』が寄贈される

～生徒の声から知る戦後社会～

先日、千葉県在住の滝澤様という本校同窓生よりお電話がありました。ご自宅の整理をしている際、生徒会(校友会)誌『蓼窓』をどうしようかと思案されて、母校へ寄贈したらどうかとお考えになりお電話を下されたのでした。

お話を聞くと、昭和26(1951)年に入学され、お歳は80歳代とのこと。私は、「大変ありがたくいただきます」とお返事しました。今週になり、丁寧に包装されたものが届きました。中には『蓼窓』の3～5号と、お手紙と資料が添えられて入っていました。



当時は戦後社会。日本国憲法や教育基本法をはじめ、戦後社会の基盤が形づくられていく現在進行形の世の中。1951年サンフランシスコ平和条約が締結され、占領統治下より日本の独立が達成。人々は民主主義国家に生まれ変わるこの国を、期待とそれを担う気概をもって生きていました。それと前後し本校も昭和24年度(1949年)より、県立高校として出発することになりました。その時代の若々しい明るいエネルギーとあふれんばかりの希望が、この『蓼窓』の頁から飛び出てきます。そして驚かされたのが、この時代の高校生の精神的な早熟さです。最後に、寄贈して下さった滝澤様に心より感謝申し上げ、当時の3年生の学芸部長が書いた巻頭言(『蓼窓』第3号(昭和27年3月刊))を紹介します。

華鯨一吼天下泰平。終戦第七年を迎えて、天下はいよいよ太平。我が蓼科高校も此れにあやかり郷土子弟教育の機会均等の大理想に、日夜文字通りの心血を注いだ甲斐あって、校舎内外の諸施設と設備の完全整備が出来、移管の芽出たい運びになった。今日此の時、各々、その研究と学風とを広く江湖に発表し、蓼窓第三巻を発刊することを得た事は慶賀に堪えない。

本校創立五十有余年の記念すべき年を迎え総合高等学校としての、普通科、農業科、林業科、家庭科の初の輝かしい卒業生を送り出すことになったが、古来今往の歩みには、種々難関があった。

岐路難関を彷徨したが、幸い一陽來復、参千の同窓友を育て上げた本校は、恰も人生の春を迎えたる如く、堂々県移管の関門を大手を振って通過しようとしている。我等学生も、本来の使命たる勉学に、研究に、一致団結して匪窮の誠を致し本校発展の基盤の礎を固めようではないか。



## 困ったお話(その25) (本格推理小説! 「姿なき狙撃手①」)

昨年、この時期のある夜のことだ。「ピシ！」と校長室の窓に固いものがぶつかる音が響いた。驚いて外を見たが、暗闇が広がっているだけだった。しばらくすると、再び「バシン！」と窓ガラスに大きな音が響いた。もう仕事どころではない。私は一目散に自宅へ逃げかえった。

困った、どうしよう。これはきっと私に恨みがある者が、ゴルゴ13を雇い狙撃してきたに違いない。しかし現実に全面禁煙の敷地内でトルコ産のタバコを吸ったり、長いもみあげの目つきの悪い大男が、M16銃を持ちポプラの陰にいたら、ものすごく目立って町中大騒ぎだ。

すると恨みのある者自身の仕業だろうか。そこは胸を張って言いたい。私は人に恨まれるだけの影響力も才能も技能も、また温泉効能もない。逆に私が人を恨んでも、相手にされないくらい軽んじられている自負があるくらいだ。ウジウジと布団の中で考えていたら夜が明けた。

朝、恐るおそる出勤すると、校長室の窓の下に豆のようなものが転がっていた。横を見たら、へなへなと力が抜けた。(謎解きは次号で)



クイズ：この状況から、犯人を探し出そう！